

2024年3月11日発行

文学文化研究と共にある生命倫理学の構築の試み

——小林寛監督『機動戦士ガンダム 水星の魔女』で描かれる
ゲノム編集と生命倫理言説との関係による効果測定まで——

西貝 怜

相模女子大学紀要 VOL.87 (2023年度)

文学文化研究と共にある生命倫理学の構築の試み

——小林寛監督『機動戦士ガンダム 水星の魔女』で描かれる
ゲノム編集と生命倫理言説との関係による効果測定まで——

西貝 怜

Attempt on Construction of Bioethics with Literary and Cultural Studies

: To Effect Measurement through Relationship Between Bioethical Discourse and
Genome Editing as Portrayed in “*Mobile Suit Gundam THE WITCH FROM MERCURY*”

Directed by Hiroshi KOBAYASHI

Satoshi NISHIGAI

Abstract : In recent years, bioethics has been questioned from the perspective of literature and culture. Therefore, this paper examines the differences in the treatment of literature and culture between literature and cultural studies and bioethics, and then explores ways to connect the two fields. The methodology extracted is also applied to “*Mobile Suit Gundam THE WITCH FROM MERCURY*” to measure its effectiveness.

Key Words : Meta-Bioethics, Interdisciplinary, Scientific Representation and Discourse, Yumezo KATO,
Mobile Suit Gundam THE WITCH FROM MERCURY

1. はじめに——前半部のまとめと目的

アニメ、マンガ、映画、小説、戯曲、歌詞などの作品群は、フィクション、ポップカルチャーと文学、メディア、テキスト、物語文化など、各々の学術分野において多様な名で総称されてきた。その中でも生命倫理学では、以上の作品群については虚構性が

重視されるため、フィクションとして扱われることが多かった。しかし、詳細は後述するが、本稿では以上の作品群を<文学文化>として扱う。

近年の日本の生命倫理学には、<文学文化>を扱うことでこの分野を新たに構築し直そうという動きがある。このとき、論じたい問題のモデルケースとして<文学文化>の物語を取り入れるのではなく、

新たな<文学文化>と生命倫理学の関係が検討されている。たとえば映画をはじめとした<文学文化>や芸術についての哲学的探求の発展は目覚ましい。そこでは<文学文化>の特質を明らかにしながらも、旺盛に生命倫理学との接続も試みられている。ほかにも<文学文化>自体の様相を考究する文学文化研究と生命倫理学の接続も確認できる。しかし、こちらでの接続は、一部の方法でのみ試みられてきたように思われる。つまり、芸術の哲学的探求との接続のように、文学文化研究と生命倫理学はさらに接近させる余地がある。

もちろん、これまでの研究の不在を指摘し不満を述べるだけでは、新たな学問のあり方を探る際に生産的ではない。<文学文化>と共に生命倫理学の刷新を図る際に、これまで以上に文学文化研究を取り入れることが貢献できると主張するには、新しく有用で具体的な方法論を提示することが必要である。

そこで本稿は、文学文化研究と生命倫理学との間にある<文学文化>の扱い方の差異を検討した上で、両分野を接続するための方法を探る。そして抽出された方法を、<文学文化>としての個別作品に適応し、その効果測定も行う。

2. 現代日本における生命倫理学の問いなおし

生命倫理学と生命倫理の違いについて、藤野昭宏は以下のように述べている。

生命倫理学は、通常、bioethics(バイオエシックス)の訳語としてよく知られている。「生命倫理」がバイオエシックスの意味で用いられることがよくあるが、これはバイオエシックスに対する誤解を招き易い。何故ならば、バイオエシックスはあくまで一つの学問または学問領域を指す言葉であって、生命に関する特定された倫理を意味するものではないからである。たとえば、「この医療行為は生命倫理に反している」というときに用いる「生命倫理」はバイオエシックスのことを指しているのではなく、生命に関する原則的で普遍的な人類共通の倫理のことを意味していることが多い。従って、バイオエシックスを生命倫理と訳すると、日本ではかなり誤解される可能性があるので十分な注意が必要である¹。

以上を参考に本稿では、日本に輸入されたバイオ

エシックスに対応する生命倫理学という学問領域と、この学問の対象としての生命倫理とを分けて議論を続ける。

生命倫理学はどのような学問なのか。玉井真理子は、「学際」を「一つの学問だけでなく、いくつかの学問にかかわっていること」と定義し、生命倫理学の扱う生命倫理的問題が時代とともに「環境問題から医療問題へとシフトしても、学際的である特徴は変わることがなかった」と述べている²。さらに玉井は、生命倫理学とは、生命倫理的問題について「答えを見つけ」るためのものではないということ強調しながら、「考える道具や考え方のすじ道を提供する」ものだと主張する³。

たしかに生命倫理学の主たる使命は、ある生命倫理的問題への一つの正しい答えを明示することではない。そのため、生命倫理学が「考え方のすじ道」を提供してくれるということも支持できる。ただ、これまでの生命倫理学が扱ってきた生命倫理的問題や蓄積には偏りがある。これについて香川知晶は以下のように述べている。

バイオエシックスがこれまで問題にしてきたのは、医療をめぐるさまざまな変化を受容するための方策である。受容の可否そのものが問われてきたわけではない。そのため、議論は、いわば選択すべき公理系がすでに定まっているかのように進行する。関心の中心は、与えられた公理系を自明の前提とし、その内部の規則にいかに従うかということに向けられる⁴。

香川は続いて、以上とは「位相が異なる」問題として、「私たちが今生きている現在はどうに語ることが出来るのか、またどのように語るべきなのか、つまりは現在をどのように生きるべきなのか」と「生命(いのち)の倫理を問いなおす」べきだと主張している⁵。『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』⁶は、この香川の述べる問題を著者間で共有し、帯に書かれている通り「文明論、歴史、メタ科学、経済批判、生権力の視点」から、つまり学際的に生命倫理学を構築し直そうと試みた論集である。

金森修も、近年の生命倫理学には「<形式化された行為規範>で医療界を武装するのを補佐する」「サブ医療、つまり<医療に付き従う何か>に近付きつつある印象がある」と、香川の言説に通じる批判を述べた上で、<文学文化>を扱うことで生命倫

理学の刷新を目指した⁷。そして金森は、生命倫理学が<文学文化>によって読者が得る「気分的なもの」を扱うことは、「サブ医療」から離れて「想像的因子」という「新機軸」を得て思考することであり、分野としての「新たな豊饒化の機会かもしれない」とも述べている。

また、小松美彦は『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』の編著者を香川とともに務めている。この本の中で小松は、生命倫理学において「感性と感情は理性や論理に比して蔑ろにされてきたといえるが、それがとくに先端医療やバイオテクノロジーに否定的なものである場合、科学に無知な者の非科学的な物言いとして一蹴される傾向が強かった」と批判的に指摘している⁸。これは、「気分的なもの」を重視する金森の目指す生命倫理学にも通じる。

さらに小松は『<いのち>はいかに語りうるか？—生命科学・生命倫理における人文知の意義—』に、科学的な生命の捉え方を批判的に検討しながら、<文学文化>や「諸芸術」を扱うことで到達できる生命の捉え方の価値を強調した論考を寄せている⁹。この小松の論は、先述した『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』の掲げる問題意識とも通じていることから、生命倫理学の新たな構築を目指した一連の研究に位置付けても差し支えなからう。

つまり金森と小松は共に、<文学文化>を扱うことで、「サブ医療」から脱却する生命倫理学の刷新を目指していた。本稿でもこれを支持して、<文学文化>と共に生命倫理学の新たな構築を試みる。このとき、まずは生命倫理学と近接領域がどのように<文学文化>と関わってきたか、これを詳細に確認する必要があるだろう。

3. 生命倫理学の中の<文学文化>

浅井篤らは、映画作品を用いた生命倫理教育の在り方について論じている¹⁰。著者らの教育実践は、「倫理無関心者の覚醒の試み」として「映画のシーンを観て心うごかさず、作品から提示される問題を自然に考える瞬間を与え」ることが目的だと述べている。そして授業の際には「現実的には困難だが、可能なら粗筋の説明と予告編提示だけで済ませたい」とも書かれている。

前節でも引用した玉井¹¹も、映画のあらすじを紹介した上で生命倫理学のあり方を主張している。玉

井の論も『はじめて出会う生命倫理』¹²という教科書に収められている。つまり、浅井らや玉井が<文学文化>を用いるのは、モデルケースとして既存の生命倫理学の知見を分かりやすく伝えるためである。このときの<文学文化>の扱い方は、物語の要約や設定を抽出してそれを端的に提示することである¹³。

ところで前節でも引用した金森¹⁴は、代理母やクローン、臓器移植などのテーマ別に、小説を主とする<文学文化>のいくつかの作品を取り上げた。そして、各々の作品の中の生命倫理学に接続しうる「設定」「条件」を確認して、<文学文化>を「フィクション」として扱い、現実の事例と<虚実交ぜ>に生命倫理的問題を論じた。ちなみにこの<虚実交ぜ>という方法は、これも前節で引用した『<いのち>はいかに語りうるか？—生命科学・生命倫理における人文知の意義—』に収められている小松の論考¹⁵にも見られる。

つまり玉井や浅井らと同様に、金森と小松の論も<文学文化>については物語の要約や「設定」「条件」の抽出で事足りている。また、現実の事例と虚構である<文学文化>を区別なく同等に扱うということは、金森が言うところの「気分的なもの」を感じさせる<文学文化>特有の表現や魅力などの特質を考えないということである。<文学文化>の鑑賞者らの「気分的なもの」、これは浅井らにとっては呼び水でしかないので、生命倫理的な考察には及ばない。玉井も明言はしていないが、同様の態度といえよう。ここで重要なのは、金森と小松にとって<文学文化>を感じさせる「気分的なもの」が生命倫理学の構築し直しに必要なという態度でありながら、<文学文化>への言及が希薄だということである。

もちろん、<文学文化>の「設定」「条件」の確認のみで、生命倫理的な新たな成果が生まれることもある。親が金持ちか否かのような、出生する家の環境によって人生が左右されるというのに、その生まれる先を子どもは選べない。このような考えが近年、親ガチャと呼ばれている。戸谷洋志はその親ガチャの様相を、ゲノム編集や反出生主義などの生命倫理的問題もテーマに組み込みながら論じている¹⁶。このような新たな問題を考えるときには、現実の事例も少ないために、特に<文学文化>の「設定」「条件」は特に有用であろう。戸谷も、小松や金森と同じような<虚実交ぜ>な考察方法を採用しながら、親ガチャについて思索を深めている。

以上のように、<文学文化>のモデルケース化や要約、「設定」「条件」の抽出で、新たな問題を生命

倫理的に考えることはできる。ただ、重ねて本稿では新たな生命倫理学の構築を目指している。それを<文学文化>との新たな関係で達成するために、ひとまず「気分的なもの」という先行研究での指摘を重視してきた。しかし、生命倫理的問題への非専門家や大衆の「気分的なもの」は、<文学文化>を扱う文化社会学や心理学などで明らかになる。それは生命倫理的問題も含むELSIなどと呼ばれる領域で学際的に問われている¹⁷。<文学文化>の与える「気分的なもの」も含む、<文学文化>の特質へ言及すること。そして、これを生命倫理学に組み込むこと。近年の日本では、このような動きが活発である。

吉川孝¹⁸によると、これまでに「芸術の哲学」分野の一つである「映画の哲学」は、「映画の特徴や鑑賞経験を分析」してきており、これはより広く「哲学としての美学の課題」と述べている。吉川は続いて「映画を哲学的分析の対象とするのではなく、映画そのものがある種の哲学的思考している可能性に目が向けられる」と書く。このような問題意識の元、映画自体の問題を考えたり、生命倫理的問題を映画で考えたりしながら、環境倫理学と生命倫理学の考究が行われている論集が『映画で学ぶ生命環境倫理学』である¹⁹。たとえばこの中で渡名喜庸哲は、新海誠監督『君の名は。』における「タイムスリップ」について、それを可能とする儀式での振り舞いや装飾品について丹念に分析する²⁰。そして、その結果を時間についての哲学的蓄積と交差させて、現代世代の未来世代への責任について考究している²¹。このように『映画で学ぶ生命環境倫理学』は、これまでの<文学文化>を扱った生命倫理学の成果の中では、特に映画そのものの特質に迫ったものである。

生命倫理学ではないが、芸術の哲学分野の知見も参照し、<文学文化>も扱いながら、恐怖を領域横断的かつ哲学的に考究した戸田山和久『恐怖の哲学——ホラーで人間を読む』なる本もある²²。現在、<文学文化>や芸術の哲学は、とても勢いのある分野である。そのために、この分野を取り入れた学際的な研究は、今後も生まれ続けることが予想される²³。その中には生命倫理学の新たな構築に貢献するものも多くなりそうである。

ただ、そもそも<文学文化>の特質を考究する分野は、芸術の哲学や美学だけではない。さらに芸術の哲学も生命倫理学も、広い意味での哲学的な分野である。<文学文化>自体の様相を考究する文学文化研究もある。詳細は次節で述べるが、生命倫理学

における文学文化研究との接続は、芸術の哲学との接続に比べて事例も少ない。

そこで、<文学文化>の特質に言及した生命倫理学の新たな構築について、どのように文学文化研究は寄与できるのか。文学文化研究自体の様相の確認と共に検討していく。

4. 文学文化研究と生命倫理学の接続方法

北村紗枝は批評を実践するための教科書『批評の教室——チョウのように読み、ハチのように書く』を著している²⁴。この中で北村は、批評の役割について「作品の中から一見したところではよくわからないかもしれない隠れた意味を引き出すこと（解釈）と、その作品の位置づけや質がどういったものなのかを判断すること（価値づけ）」と述べている²⁵。そして「小説の地の文のちょっとした描写とか、色の設計とかとか、舞台芸術の小道具とか」「対象をものすごくじっくり細かいところにまで気を配って読むやり方を「精読」（クロス・リーディング）と呼び、あらゆる批評の基本とされています」とも書く²⁶。さらに「精読にあたってすべきこととすべきでないこと」を確認して、「精読の結果として気付いたさまざまなことをふまえ、テーマを決めて一貫性のある解釈を提示していくやり方」を示す²⁷。全四章からなる本書の前半二章までが、以上の手引書的な説明に割かれている。すなわち、何よりも批評では整理や分析を重んじるということである²⁸。

北村は批評という言葉を使っていたが、文学文化研究一般の基本も、以上のように<文学文化>の媒体ごとおよび作品ごとの細かな表現に注意して精読し、その上でテーマを決めて解釈することが基礎であり最も重要なことと言えよう²⁹。

ところで『尊厳と生存』³⁰は、加藤泰史の論考のタイトル「編者前書き コロナ・パンデミック下で「生存」／「生命」が「尊厳」概念を問い直す」³¹を問題意識として共有した、様々な分野の論考が集められた論集である。その中に、文学文化研究を専攻するギブソン松井圭子の論考も収められている³²。ギブソン松井はジョゼ・サラマーゴ『白の闇』³³で描かれる「失明はメタファー」と捉え、以下のように考察を展開している。

文学的な構想力としてのメタファー（あるいは比喩表現）は言語上の問題のみならず認知や思考

とも密接に関連している。文学作品を通じて「尊厳」を考察するということは、尊厳にまつわる人間の経験のあり方がどのように表現・表象されているかを検証することである

～中略～

「見る」「見えなくなる」「見えない」「見える」「見ていない」この五つの「見る」のメタファーの活用のヴァリエーションによって言語学的あるいは心理学的理解に回収されない人間経験の心の在りように光が当てられる。

ここで注目したいのは、以下の二点である。一点目は、メタファーという表現に注視した文学文化研究の成果は、他の分野に回収されない独自性があるということ。二点目は、その成果が広く尊厳という生命倫理的なテーマを考えることに通じること、すなわち広く人間を考えることに貢献でき、人文諸分野とも密接に関わり合うということである。佐藤秀明も、個別作品の文学文化研究について以下のように述べる。

…中略…作品の意味の解明とは、意味の文脈の見出す作業にはほかならないということである。作品の読解は、必ず既成の人文的諸価値の文脈に結びつく。ときには作品内の考証が、作家論的文脈に結びつくこともあろうし、文化史的な文脈に結びつくこともあろう。あるいは作品周辺の考証が、文学史的な文脈に結びつくこともあろう。文脈の提示は読解された、作品の提示であり、それは必然的に既成の諸価値との関係を示すことになる³⁴。

このように、一つのテーマを多角的に検討する際に、生命倫理学と文学文化研究は接続しうる。ただ、以上の『尊厳と生存』の例は、各々の学術的立場での成果が独立しており、その成果が重なる、あるいは共鳴するというものである。前節で確認した「映画の哲学」を取り入れた生命倫理学の構築のように、<文学文化>の特質を論じる文学文化研究を踏まえた生命倫理学の新たな構築は可能なのか。

かつて生命倫理学の一つのテーマであった環境問題。これを扱う文学文化研究の一分野である環境批評について、ローレンス・ビュエルは『環境批評の未来——環境危機と文学的想像力』を著した³⁵。まず「この本は、文学や文化研究にとって地球上の生命の絶滅寸前の状態や不確実な運命にとって文学や文化研究が何を意味するのかについて、精魂を傾け

て考える時間と意志を持つすべての人のために書かれたものである」とはじまる³⁶。そして、環境批評とは「戦略的には曖昧な表現」でありこの分野を「もっとも幅広く包括する語」と述べている³⁷。さらに、その方法論は学際的で「一枚岩」でないことや³⁸、学問としての「明確な地図を描くことは不可能」とも述べている³⁹。

ビュエルの言説には、環境倫理学と文学文化研究の接続の際に「一枚岩」の方法がないということも含まれていよう。ならば、生命倫理学と文学文化研究とを接続した「一枚岩」の方法を構築するのも難しそうにも考えられる。ただ、それはメタセオリー的なことを提示することが困難であるというだけであろう。「映画の哲学」を援用した生命倫理的考察を展開した論集『映画で考える生命環境倫理学』も、作品の整理や分析の仕方は多様である⁴⁰。

精読そのものを制度化することは難しい。<文学文化>の媒体の違いだけでなく、各々の作品ごとの表現もテーマも異なるからである。ただ、精読に際し、あるいは精読の上で、文学理論や批評理論の適用はできる。そして、文学文化研究も発展している。これらを想定したときに、加藤夢三の一連の科学言説研究が浮かんでくる。

加藤夢三は『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』を著した。その背景と目的は、以下のようになっている。

これまで文学研究の領域においては、個々の書き手たちが自然科学の学知にどのような応答を示し、それが各々の文学作品のなかにどのようなかたちで落とし込まれていったのかという検討は相応に積み重ねられてきたものの、その通時的・共時的な創造行為の射程については、ほかの領域と比べてあまり考察が展開されてこなかったように思われる。本書では、そのような研究状況に鑑みて、文学言説と科学言説を越境し、そこに立ちあらわれた言説のあり方を横断的に把握することを目指したい⁴²。

本書の構成について、黒田俊太郎は以下のようまとめている。

本書の構成は、一九三〇年代の<科学>をめぐる言説編成を析出しようとする第Ⅰ部、<科学>の知見を自身の文学理論に積極的に取り込もうとした文学者たちの活動を論じた第Ⅱ部（横光利一

に焦点化)・第Ⅲ部(その他のモダニズム文学者たち)となる。また、補論として量子論が提出した「並行世界」をモチーフとした、東浩紀・円城塔のゼロ年代小説について論じた論文二編が付け加えられている⁴³

つまり、Ⅰ部で作家たちが「自然科学の学知にどのような応答を示し」たか科学史的に明らかにした上で、Ⅱ、Ⅲ部でその作家らとその「学知」を「各々の文学作品のなかにもどのようなかたちで落とし込」み何を描こうとしたのかまでを文学研究的に明らかにしたのが『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』である⁴⁴。

以上の態度は補論にも通じる。ここで具体的に「補論ⅰ:「存在すること」の条件——東浩紀『クォンタム・ファミリーズ』の量子論的問題系」の結論部分を読んでみる。

…中略…SF小説としての『クォンタム・ファミリーズ』に持ち込まれた量子テクノロジーの学術的知見には、それまでの<いま・ここ>を唯一の基点とした「生」の諸相に対して、異なる存在の様式のあり方を開示するような可能性が賭けられていたことが了解されよう⁴⁵。

以上の考察を加藤は、次著『並行世界の存在論——現代日本文学への招待』⁴⁶でさらに進めている。この本の中で加藤は「サブカルチャー・純文学を問わず、並行世界を扱った物語作品の大半が、概して現実世界のかげがえのなさを再確認し、その唯一性・特権性を補強するものでしかありえなかったことは、やはり否定できない事実である」と述べる⁴⁷。伴名練「なめらか世界と、その敵」⁴⁸にも、主人公の葉月が様々な並行世界を行き来できるにもかかわらず、結末で一つの世界に留まる決断が描かれている。しかし加藤は、この作品が「並行世界を移動するとはどういうことなのかという原理的な問いを誘発せずにおかない」⁴⁹と指摘する。これは本書の結論の一つである、並行世界を描くという「物語様式においては、あるひとつの現実世界のなかで、たったひとりしか居ない「私」はどう生きるべきかという伝統的な実存の探究ではなく、そもそもひとつ／ひとりだけ存在するとはどういうことかという、言わば存在の仕方に関わる思考の転換こそが問われなければならない」⁵⁰に接続される。

具体的に加藤の論を読むと、加藤の研究の立場は

言説研究、科学表象の研究と言える。つまりある<文学文化>の作品が現実の科学を受容して、それに関する言説や表象が何を問っているのかを、加藤は考えている。そしてこのような研究は、作品のさらなる理解にも、哲学的思索にも開かれる。

たとえば、加藤の「なめらかの世界と、その敵」に関する論考では、結末部の葉月の決断の描き方には触れられていない。加藤による並行世界の言説研究の結論を経て、あらためて作品全体を論じることも出来るだろう。

また、ヴォルフガング・イーザーの読書についての哲学的な考究は、「可能性と現実世界の相互作用」を論じており、「虚構がそのつどヴァージョンを越えて、ほかのヴァージョンに介入する」ことが(おそらく)新たな「世界制作の条件」であるという前提を元に、「生活(現実)世界を前提として、読書行為を問い直す」ことが「世界制作であることを示す見方を開く」という⁵¹。加藤は一連の言説研究を進めるにあたって、一部の読者が感じている現実世界への居心地の悪さについて度々言及している。「可能性と現実世界の相互作用」として読者が読書行為で新たな「世界制作」を行うというイーザーの研究は、加藤の並行世界の思索を、現実の読者まで含めたより広い領域まで拡大できるかもしれない。

以上で見てきたのは、その表象や言説を起点として異なる学問分野の考察が広がるということである。しかし、同じ作品を用いて同一の地点から分野を超えた研究が進められるということは、その各々の成果も独立した学問分野のものとして閉じることなく、さらに領域横断的な考察に接続できそうである。もしできなくても、各々の分野の接続を重視するならば、先に明らかにされた表象や言説に戻ればよい。

つまり、ある個別の作品について、現実の医科学の問題との関係から表象や言説を論じることが、生命倫理学と文学文化研究の接続の基点になりうる。これは、「映画の哲学」を踏まえた生命倫理学とは異なる、<文学文化>の特質に言及した生命倫理学の構築の一つの方法になりそうである。

ただ、本稿では加藤の研究をさらに、たとえば作品論的に問うたり、生命倫理学的考察に接続したりはしない。というのも加藤の研究は、端的に生命倫理学にはあまり関わっていない。そこで以降では、現実の科学を踏まえた<文学文化>が問っている言説や表象という立場から、別の作品を分析し、ここで導き出された方法の効果測定を行う。

5. 『機動戦士ガンダム 水星の魔女』の生命倫理言説

小林寛監督『機動戦士ガンダム 水星の魔女』（以降『水星の魔女』）⁵²では、はじめから「生命倫理」という言葉が登場し、独自の生命倫理的問題が描かれている。また、クローン、ゲノム編集などに関連するような描写も見られる。

本節ではまず、作中で語られる「生命倫理」とはどういった意味で使われているのか、「生命倫理」についてどのように言及されているのか、「生命倫理」言説から作品がどのようなものだと考えられるのか、これらを先行研究と共に明らかにする。

重要なのは、次節である。次節では特にゲノム編集されたトマト表象を現実の応用遺伝学の知見を踏まえて分析する。映像を用いたトマトのゲノム編集言説の機能や意味を明らかにした上で、本節との考察と繋げる。これにより、本節での『水星の魔女』の作品論的な考察がさらにどのように展開できるのか、生命倫理的にはどのような考察ができるのか、明らかにする。

『水星の魔女』のいわゆる本編は、前日譚の「PROLOGUE」、Season 1の1～12話とSeason 2の13～24話からなる。Season 1のオープニング曲はYOASOBI「祝福」である^{53, 54}。「祝福」の歌詞は「目一杯の祝福を君に」で終わるが、これは24話のタイトルでもある。どうやらこの祝福という言葉が、『水星の魔女』を理解する手がかりでもあろう。

小川公代は、「ケアの倫理」という視点も取り入れながら、かつ様々な魔女を描く他の作品と比較しながら、『水星の魔女』について「作品から響いてくる魔女たちの多層的な声を検討したい」と述べている⁵⁵。実際に議論は「多層的」であり、小川の論を要約するのは難しい。ただ、小川は、作中の倫理的問題と祝福という問題を繋げて、以下のように述べている。

巨大な経済圏が構築された宇宙を舞台とした物語で、時に受動的になりながらも他者の声に耳を傾けるスレッタの〈ケアの倫理〉は、独りよがりの正義を振りかざす登場人物の心も解きほぐしていく。自分が変わることで社会を変えていくこの物語は、他者とのつながりによって世界を祝福しようとする、まさに魔女の世界が表現されている。

小川の論には、以上の考察と通底する箇所として

「他者を配慮する〈ケアの倫理〉が自己の正義を追求する〈正義の倫理〉の対抗原理として立ち現れている」と書かれた箇所もある。この主張は、第8話にて作中では既に殺されているカルド・ナポの録画動画内の言葉を引用した上で述べられている。そのカルドの言葉は以下である。

宇宙に生命圏を拡大しておよそ一世紀。私たちは宇宙環境との戦いを強いられてきました。無重力、真空、大気組成、宇宙放射線、ワクチンやインプラント・アプリは高額で、障害そのものを抑制することは難しい。だからこそ私たちの提唱するGUND医療は身体の脆弱性を補う——希望の技術となりうるのです。GUNDには生命圏の拡大だけでなく地球と宇宙、双方の分断と格差を融和する可能性をも秘められています。どうか私たちの願いに人類の未来に共に手を携える光があらんことを。

これは「PROLOGUE」内で語られる「生命倫理」の問題と対になっている⁵⁶。

「フロント第3自治区は20日、オックス・アース社製モビルスーツ——ガンダムタイプ購入予算の決議案を可決。同社の兵器システムは、搭乗者への生命倫理問題が大きな懸念とされており、オックス社及びモビルスーツ開発評議会の説明責任が問われています」

「〈GUNDフォーマット〉は元来、宇宙環境で生じる身体機能障害の補助を目的とした医療技術です。しかし研究元である〈ヴァナディース機関〉をオックス・アース社が買収、GUNDフォーマットがモビルスーツへ軍事転用されると、今度は〈データストーム〉による身体へのダメージの問題が浮上しました」

そして、このような「オックス・アース社製モビルスーツ——ガンダムタイプ」への政治的な決定について会見が開かれ、サリウス・ゼネリによってその内容が説明された後、その決定理由もデリング・レンブランによって述べられる。以下の上二つがサリウスの、下三つがデリングの言葉である。

「我々〈モビルスーツ開発評議会〉は先ほど、ガンダムタイプのモビルスーツ開発をすべて凍結することに決定しました」

「これに伴い、評議会は同機を開発したオックス・アース社に対し、企業行政法による強制執行を行います」

「しかし、ヴァナディースとオックス・アースのモビルスーツは違う。相手の命だけでなく、乗り手の命すら奪う。これは道具ではなく、もはや呪いです」

「命を奪った罰は、機械ではなく、人によって科されなければならない」

「人と人が命を奪いあうことこそ、戦争という愚かしい行為における最低限の作法であるべきです」

「PROLOGUE」では、「オックス・アース社製モビルスーツ——ガンダムタイプ」が「戦争という愚かしい行為における最低限の作法」すら破るとして、政治的な決定により開発中止になる。そればかりか、カルドを含めたオックス・アース社の多くの人々は粛清され殺されてしまう。これは小川の言うところの「自己の正義を追求する」「独りよがりの」<正義の倫理>であり、以上のカルドの言葉に見られる<ケアの倫理>とは対比的である。

その後、7話でスレッタ・マーキュリーが搭乗していたエアリアルが「モビルスーツ——ガンダムタイプ」だと、ベネリットグループの総裁でありカテドラルの統括代表のデリングに露呈してしまう。だが、デリングの娘であるミオリネ・レンブランが「協約の縛りや生命倫理問題は私と会社が引き受けます」と述べ、株式会社ガンダムを設立するからとパーティに参加している人々に投資を募る。

そして8話で、無事にお金を集めたミオリネは共にアスティカシア高等専門学園に通う学生らの仲間と、株式会社ガンダムの事業を考える。そのときに、皆で先述のカルドの言葉が発せられるビデオを見る。そして、皆でコマーシャル動画を作り、そこで最後に社訓「株式会社ガンダムは、ガンダム技術による医療事業を目指します」も語られる。ここの場面はYouTubeのガンダムチャンネルで公開されており、高評価ボタンが多く押されているコメントに「いかにも「学生の手作り」というノリで作られたPV。エアリアルが合成であることを強調したり、細かい所でやっつけ仕事かつ突貫で作ったというのがいい」というものもある⁵⁷。

一度は<正義の倫理>に駆逐されてしまった「モビルスーツ——ガンダムタイプ」を、学生らがカルドの<ケアの倫理>と同様の視点で、作中の「生命

倫理」の問題を乗り越えて利用しようとしている。この学生ら、というのが『水星の魔女』では重要である。

今一度、7話を確認してみる。スレッタの母であるプロスペラ・マーキュリーは、自身の娘が死ぬ原因を産み、仲間を殺す命令を出したデリングについて、その娘のミオリネに「ガンダムを禁忌にした英雄」と述べる。さらにミオリネがデリングを「父親だと絶対に認めたくないと」と言うと、プロスペラは「その素敵なドレスも、今、身に着けているヒールもアクセサリーも」「他者から受ける敬意も、そのすべてが」デリングの「力のおかげ」なのにと笑いながら答える。さらにプロスペラは「かわいい意地を捨てなくっちゃね、デリング総裁のお嬢さん」と挑発する。ここに、プロスペラは本心を隠せる大人、ミオリネは意地を表出してしまう「お嬢さん」たる子どもという対比が見て取れる。

さらにこの7話の後半でミオリネがパーティの聴衆に投資を持ちかけたときに「お前には信用がない」とデリングに言われる。しかし、最初に信用のあるデリングが投資したことで、会社設立に足る投資を受けることが出来る。毛嫌いしている父がいなければ会社設立が叶わなかった、すなわち、ここでもいまだミオリネが父の庇護の下の子どもであることが強調されているとも考えられよう。

以上からまず、『水星の魔女』における「生命倫理」の問題は、登場人物間で相違なく認識されており、単純なものである。<GUNDフォーマット>という「身体機能障害の補助を目的とした医療技術」を援用した「モビルスーツ——ガンダムタイプ」への搭乗は、時に人の命まで奪うことがある。これが是か非かということである。

さらに「生命倫理」の問題について、「モビルスーツ——ガンダムタイプ」の必要性と善性を唱えるのは大人であるカルドのものであり、ミオリネらはそれを受け継いでいるだけである。さらに、作中でミオリネらは「ガンダム技術による医療事業」の具体的な成果を挙げていない。「大人たちの思惑とは?」「ガンダムの呪いとは?」「少女たちと少年たちの進む道に、祝福あれ」とは『アニメージュ』「2023.1月号」での特集の巻頭言である⁵⁸。

『水星の魔女』とは結局のところ、小川の述べていることとも通じるように、子どもたちの頑張る世界の今後を祝福する作品である。ここから、『水星の魔女』における「生命倫理」に関する描写が鑑賞者に投げかけるものは、生命倫理とは解決しないも

のであり子どもが考え続けるもの、などと一旦は言えよう⁵⁹。

6. 『水星の魔女』のゲノム編集から拓かれるもの

ここでは、クローンとゲノム編集に関する作中の言説を分析し、その結果が『水星の魔女』を考える文学文化研究と、『水星の魔女』で考える生命倫理学と、各々にどのように影響するかを測定する。

「データストームの中でしか生きられないエリィの変わり——スレッタは、エリクトの遺伝子から作られた「リブリチャイルド」だった」、このように雑誌ではまとめられている⁶⁰。おそらくプロスペラが自然生殖以外の方法、たとえばクローン技術などでスレッタを作り出したのであろう。詳細は定かではない。そして、そのようなクローン技術でヒトを作り出すことについての倫理性は、作中で問われることもない。

次に、トマトについてである。ミオリネはアステカシア高等専門学園に自身専用の温室を持ち、そこでトマトを育てている。1話でミオリネの口から、そのトマトの「品種」はノートレット・レンブラン、すなわち「お母さんが作」った「特別」に「美味しい」ものだと語られる。そしてそのトマトの品種が、植物の遺伝育種科学的な方法で造られている。まずはこの技術を確認する。

DNAとはデオキシリボ核酸のことであり、A（アデニン）、T（チミン）、G（グアニン）、C（シトシン）の4種類の塩基から構成されている。AとT、GとCが対となり、これを塩基対という。たとえばAとT、TとA、GとC、GとCという塩基対が順に並んでいたとする。すると二つの配列が出てくる。一方はATGG、もう一方はTACCの順に並んでいるということになり、これを塩基配列と呼ぶ。連続した塩基3個1組の塩基配列を遺伝暗号（コドン）と呼ぶ。遺伝暗号はアミノ酸に変換される。ちなみにこの変換されるアミノ酸は全20種類であり、それぞれのアミノ酸をアルファベット一文字などで表した遺伝暗号表なるものが、研究上よく用いられている。たとえば上述の遺伝暗号TGGならばトリプトファン（W）に変換される。さらにこのアミノ酸の順番をアミノ酸配列と呼ぶ。その順番ごとにリボソームでアミノ酸を繋げたものがタンパク質である。このタンパク質が合成される過程を翻訳と呼ぶ。

物質としてのDNAが意味ある塩基配列をなすなど、それらの情動的な部分を遺伝子と呼ぶ。ちなみに、DNAのごく少数のみが遺伝子であり、ほかには非コードDNA（ノンコーディングDNA）と呼ばれる。その遺伝子の情報はRNAに転写（コピー）される。RNAもDNAと同等の過程でアミノ酸を合成できる。ただ、両者の塩基は一部異なる。RNAの塩基はA（アデニン）、G（グアニン）、C（シトシン）、U（ウラシル）である。

ある生物の総ての遺伝的な情報をゲノムと呼ぶ。そして以上の翻訳に関するルールはすべての生物に共通して見られる。

また、「ゲノム編集技術は、DNAの狙った場所に変異を加えることができる技術で、狙った場所に塩基の欠損、塩基の挿入また遺伝子の導入などを行うことが可能です。遺伝子組み換え技術は、異なる種の生物が持つ遺伝子を導入（例：微生物から植物）する技術ですが、狙った場所に入れることはできません⁶¹」。さらに2023年現在でも、「新たに遺伝子を入れる遺伝子組み換え食品は、それによって人間に害を及ぼすことがないか、国の安全性審査を受けることが義務づけられて」おり、一方で「ゲノム編集食品は、もともとある遺伝子を切るだけだとして」「国の安全性審査」を受けなくてよいことから、ゲノム編集でもリスクや市民の反発感情があることまで、報道されている⁶²。

ここで『水星の魔女』に戻る。22話ではミオリネの育てるトマトの品種名が「NR400、アネシドラ、大地より贈り物を送る女性って意味」であることが、スレッタによって明かされる。スレッタは続いてその品種名と共に「遺伝子コード」をロウジ・チャンテと調べたと述べる。そして、映されるのはその「遺伝子コード」と虚構の遺伝暗号表と、変換により生成された文である。

示されている塩基にUがなく、A、T、G、Cの4種が3つで1セットにされていることから、DNAの遺伝暗号である。ただ、遺伝暗号とアミノ酸の対応を見ると、出鱈目である。たとえばGTCはV（バリオン）、I（イソロイシン）に変換されるのはATT、ATC、ATAである。しかし、GTCはIだと描かれている。とまれ、この虚構の遺伝暗号のなんらかの変換によって「I will always be attached to you, Miorine」という文が生成されている。ということは、遺伝子を組み込む場所を選べないということではないので遺伝子組み換えでなく、任意の場所の塩基を操作することが出来るゲノム編集の技術

で造られたトマトということであろう。

いわゆる「気分的なもの」からの反発感情もあるゲノム編集だが、具体的に誤った遺伝子を切ってしまいそれに気付かない「オフターゲット」という問題が起こりうる。とても慎重な技術に関わらず、ノートレットがゲノム編集でミオリネへのメッセージの文をトマトに組み込んでいた。もちろん、諸説あるが機能しないようなDNAもある。ただ、個人的なメッセージをDNAに組み込むことは許されるのか。しかし、作中でこれは問われることはない。そればかりか、ミオリネへのメッセージを産む遺伝暗号の塩基配列が、プロスペラの動かす兵器を停止させる暗号だった。

「レプリチャイルド」もトマトのゲノム編集も、その倫理的問題は作中で問われない。ここから、『水星の魔女』のあまりに倫理を問わない様相が照射される。

たとえば12話で、ヴィム・ジェタークはデリングを殺そうとしていた策謀の末にモビルスーツに乗り込み、それに乗っていると気付かない息子のグエル・ジェタークによって殺される。以降のヴィムについては、主にグエルの立ち直りと死んだ父との絆の話で触れられることがメインになり、生前のグエルへの激しい叱責や、あまりに悪辣な策謀などは問われることはない。

同じく12話ではスレッタがエアリアルに乗って、殺されそうになっていたミオリネとデリングを助ける。人を助けるために人を殺すことについて全く意に介さないスレッタに、ミオリネは「人殺し」と呼び顔を歪める。これについてスレッタは具体的に反省もしないし、ミオリネもさらに本人に言及することなく仲直りしていく。さらに、プロスペラは如何に犠牲があらうともエアリアルの中に存在する娘のエリクトの生活圏を拡大するように、世界を作り直そうとして大規模な破壊工作を行った。しかし、それも問われることなく、最終話の24話では穏やかな顔でスレッタやミオリネとともにいる。この最終話の倫理を問わないことでの大団円は凄まじい。ほかにも人が死んでしまうことを知っただけで、ガンダムに人をとっかえひっかえ搭乗させて実験を進めてきた、ペイル社のニューゲン、カル、ネボラ、ゴルネリの4人の共同CEOも優雅にお茶をしていて、特にお咎めもない。

このように、『水星の魔女』における現実の科学と結びつく科学言説や科学表象を読み解くことで、作中で後景化される倫理の問題が浮かび上がる。こ

れを一度は小川の論に回収された「生命倫理」の考察とも接続して、さらなる作品の理解を深めることができよう。たとえば、作品が倫理を問う場合と、問わない場合の差異とはなにか。ここから、新たな考察がはじまり、その深化は『水星の魔女』の倫理と表現に注目した作品論的営みにほかならない。

また、『映画で考える生命環境倫理学』の編著者の一人である横地徳広は、マンガの中で描かれる優生思想を指摘した上で、「虚構の発想それ自体は、いかなる危険性をもつのか?」「虚構と現実のあいだで考察」する論考も書いている⁶³。虚構だからと安易に現実にそのまま結びつける危険性は、特にトマトのゲノム編集の言説を中心に、『水星の魔女』にも広く当てはまる。このとき、ではなぜ作中の「生命倫理」だけ問われ、現実に接続しうのような問題やほかの倫理的問題は問われないのか。これらをより細かく分析することで、作品内の倫理的な様相がより明らかになり、「映画の哲学」とも重なるさらに学際的な生命倫理学が目指せそうである。

『水星の魔女』を探究する文学文化研究も、作品で考える生命倫理学も、科学言説や科学表象を起点とした分析は作中の「生命倫理」の問題と結びつき、どちらもまずは問われない倫理の様相を分析することが考察を進める基点となっており、その結果もさらに重なりそうである⁶⁴。

7. おわりに——課題と展望

繰り返すが前節の役割は、科学言説や科学表象というものの分析を経て、どのように文学文化研究と生命倫理学が接続しうるかの効果測定である。その結果、『水星の魔女』を扱う場合においても、生命倫理学にとって文学文化研究が新機軸となることが示された。ただ、『水星の魔女』は、あまりに導き出した方法論が著効な作品であり、考察も展望の色が強い。やはり具体的に考察を進めて成果を挙げたほうが良いだろう。しかし、各々の立場からのさらなる『水星の魔女』を用いた考察の深化は、一つの論文には荷が重い。これは今後別の論文で試みたい。

あらためて環境倫理学と文学文化研究が交差する様相も見られる環境批評が、方法も分野としての輪郭も提示できないというビュエルの言葉を思い出してみる。本稿での方法の構築の試みも、その結果が仮に著者の想像以上に一般化できるとしても、メタセオリーたりえない。批評実践のための教科書『批評の教室』を著した北村は、同書の中で「注意しな

なければならないこととして、全ての作品を同じ理論で切れるわけではないという点があります。サッカーでも将棋でも、どんな相手にでも同じ戦略で勝てるわけではありません」とも述べている⁶⁵。それでも理論や方法の開発に価値があるのは言うまでもない。たとえば、学際的な研究は、緩いテーマおよび緩い方法論だと結びつきやすい傾向にあらうが、テーマも方法も細部にこだわることで具体的に発展しうるからである⁶⁶。

先述した『水星の魔女』論にも見られるが、小川は様々な学術分野を取り入れ、さらに国内外の様々な文学文化をを対象として文学文化研究を進めている。近年は、ケアの倫理を主軸に旺盛に活動しており、その成果は現実のケアの倫理と文学文化研究の、(どちらかというと後者に寄っているが) 融合的なものも多い⁶⁷。また、福島亮大は『感染症としての文学と哲学』を著している⁶⁸。「病のイメージに多くの仕事を任せてきた哲学と文学、その二つを新しいやり方で交流させ」るのが本書のねらいであると書かれている⁶⁹。実際に世界文学、哲学、現代の社会問題、病の表象の多角的分析と、トピックは多様である。

小川も福島も、博搜した確かな知識を用いて、生命倫理の問題にかかわる哲学的考察と文学文化研究が密接に関わっている。この二人の研究は特異である。このような研究は如何にしてなされるのか。本稿は生命倫理学の刷新のために、方法論を新たに構築しようとした試論にすぎないが、その目線の先には、このような独創的な研究がある。本稿での試みを確かなものにする作業も必要だが、あえて最後に大きな展望を述べたい。

重ねて『水星の魔女』について本稿の成果を引き継ぎさらに考察を展開するためには、まずは生命倫理学と文学文化研究のどちらの立場だろうと、作中で倫理が問われないことを「生命倫理」言説と比較して分析しなければならない。一つの作品をめぐる領域横断的な考察が、科学言説や科学表象と問われない倫理の二点で繋がっている。これは生命倫理学という閉じた領域の発展だけでなく、小川や福島の成果のようなより広い視野での人間理解の方法を具体的に構築することにも繋がるだろう。

註

- 1 藤野昭宏「生命倫理学とは何か——その考え方の基礎と限界、生存科学への道」『産業医科大学雑誌』20(3)、213～244頁、1998年。
- 2 玉井真理子「序章 答えの出ないことを考え続けるために——生命倫理学という学問」『はじめて出会う生命倫理』（玉井真理子、大谷いづみ編）有斐閣、1頁および2～18頁、2011年。
- 3 「学会について——概要」『日本生命倫理学会』<https://ja-bioethics.jp/about/info/>（最終閲覧：2023年12月23日）。この「目的」の項目には、生命倫理学会の目的は「生命倫理に関する諸問題の研究 - 科学技術一般と倫理との関係の研究、関連する社会的課題の研究および関連分野の学際的総合研究 -」推進を図ることであることが明記されている。さらに「専門分野」の項目は、たとえば「第2分野 哲学、倫理学、心理学、科学思想史、その他の関連領域」のように、関連する様々な学問分野が第1～4分野に分けられている。このように、日本生命倫理学会のホームページからも、生命倫理学の学際性が見て取れる。
- 4 香川知晶「まえがき」『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』（小松美彦、香川知晶編著）NTT出版、I～IV頁、2010年。
- 5 加藤尚武・檜垣立哉「I 「日本の生命倫理を総括する」（往復書簡）」『生命と倫理の原理論——バイオサイエンスの時代における人間の未来——』（檜垣立哉編）大阪大学出版会、15～60頁、2012年。この中の「5 先例のない事例 unprecedented cases」32～35頁より、檜垣立哉は「生命倫理学・応用倫理学」が「先例のない事例」に対して「それが為される以前に、違法であるか違法でないかが、誰にとっても明らか」にするための「社会的営為」の役割があると述べている。
- 6 小松美彦、香川知晶編著『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』NTT出版、2010年。
- 7 金森修「虚構に照射される生命倫理」『知識の政治学——〈真理の生産〉はいかにして行われるか』せりか書房、161～191頁、2015年。
- 8 小松美彦「序章 メタバイオエシックスの構築に向けて」『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問い直す』（小松美彦、香川知晶編著）NTT出版、3～38頁、2010年。

- ⁹ 小松美彦「〈いのち〉はいかに理解されるか——科学的生命観と人生論的生命観」『〈いのち〉はいかに語りうるか？—生命科学・生命倫理における人文知の意義—』（学術会議叢書24）日本学術協力財団、55～115頁、2018年。
- ¹⁰ 浅井篤・牧左希子・福山美季「『映画を通して考える生命倫理』授業に関する報告」『医療・生命と倫理・社会』10、47～58頁、2010年。
- ¹¹ 註2と同じ。
- ¹² 玉井真理子、大谷いづみ編『はじめて出会う生命倫理』有斐閣、2011年。
- ¹³ 浅井篤「はしがき—映画は楽しい考える糧」『シネマの中の人間と医療——エシックス・シアターへの招待』（浅井篤編著）医療文化社、i～iv頁、2006年。この本自体の帯には「楽しい！ 深い！ 分かりやすい！」「まったく新しいタイプのバイオエシックス入門」と書かれている。本書は様々な映画を取り上げ、その映画ごとに物語を要約的に扱い、一つの生命倫理的問題を抽出して、その問題を生命倫理的に考えるように読者に促す。そして浅井はこの本について、前書き的な「はしがき—映画は楽しい考える糧」で、「映画で扱われているテーマをすべて取り上げるといってもしていませんし、作品のメインテーマに触れていない」こともあり「映画を批評の対象にしたり、構造をはっきりさせるために解剖したりはして」いないと述べている。註10の論考の内容にも通じるように、この本自体の構成も、映画の楽しさで人を呼び込み、そのあとの思索は映画の要約で事足りるのである。
- ¹⁴ 註7と同じ。
- ¹⁵ 註9と同じ。
- ¹⁶ 戸谷洋志『親ガチャの哲学』（新潮新書1023）新潮社、2023年。
- ¹⁷ 「ELSIとは、倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Issues）の頭文字をとったもので、エルシーと読まれています。新規科学技術を研究開発し、社会実装する際に生じうる、技術的課題以外のあらゆる課題を含みます」。以下より。「ELSIとは」『大阪大学社会技術共創センター』https://elsi.osaka-u.ac.jp/what_elsi（最終閲覧：2023年12月20日）
- ¹⁸ 吉川孝「序章 映画とともに思考するとき」『映画で考える生命環境倫理学』（吉川孝、横地徳広、池田喬編著）勁草書房、1～12頁、2019年。
- ¹⁹ 吉川孝、横地徳広、池田喬編著『映画で考える生命環境倫理学』勁草書房、2019年。
- ²⁰ 渡名喜庸哲「第7章 カタストロフィを語る哲学と映画——『君の名は。』が描く「災後」の「時間」」『映画で考える生命環境倫理学』（吉川孝、横地徳広、池田喬編著）勁草書房、133～150頁、2019年。ここで引用されている『君の名は。』の出典情報は「新海誠（2017）『君の名は。DVDスタンダード・エディション』（DVD）東宝」と書かれている。
- ²¹ 現代を生きる我々は、存在していない未来の世代にどのような責任があるのか。このような問題は未来倫理、世代間倫理などと呼ばれている。両者は厳密には異なるが、ひとまずこのような未来への責任についての倫理学の考え方について、特に未来倫理について解説した本を参考までに挙げておく。戸谷洋志『未来倫理』（集英社新書1148C）集英社、2023年。
- ²² 戸田山和久『恐怖の哲学——ホラーで人間を読む』（NHK出版新書478）NHK出版、2013年。生命倫理学ではないが、戸田山和久も、恐怖について多角的に検討している。表象という概念を丹念に整理したり、その恐怖の表象が認められる映画を上述の吉川のように「映画の哲学」から考察したりしている。
- ²³ 現在、芸術や<文学文化>を哲学的に分析する分野の勢いは、専門雑誌も作られるほどである。「その哲学とは、現在もっとも勢いのあるタイプの哲学、明晰な論理展開を旨とする、分析哲学という哲学です。さまざまな問いに対してすべて一から分析していく。考えたい問題を考えるためのツールを提供する。それが、分析哲学の姿勢です。『フィルカル』では、分析哲学に焦点をあて、ハイカルチャーからサブカルチャーまで、さまざまな文化を分析哲学のツールを使って分析していきます」。編集部一同「概要——フィルカルとは」『フィルカル PHIROSOPHY & CULTURE—分析哲学と文化をつなぐ—』https://philcul.net/?page_id=42（最終閲覧：2023年12月20日）より。
- ²⁴ 北村紗枝『批評の教室——チョウのように読み、ハチのように書く』（ちくま新書1600）筑摩書房、2021年。
- ²⁵ 同上、12頁。
- ²⁶ 同上、18～20頁。
- ²⁷ 同上、68頁。

- 28 カレン・M・ゴックシク、デイブ・モナハン、リチャード・バーサム『映画で実践！——アカデミック・ライティング』（土屋武久訳）小鳥遊書房、2019年。この本は映画の考察で論文やレポートを書くための基礎的な方法が書かれた教科書である。大きく三部に分かれており、第三部は参考資料に関する箇所であり、本編は大きく二部から成る。「第①部 書くための準備」（9～94頁）は、メモの取り方、映画の演出ごとの整理の仕方などに割かれている。すなわち、ここでも『批評の教室——チョウのように読み、ハチのように書く』と同様に、なによりも映画の表現にかかわる整理や分析が重視されているのである。
- 29 註7の金森は、小説と映画を引用し、それらをフィクションや虚構と呼んだ。物語が描かれた諸作品は様々に総称できるが、<文学文化>と本稿で呼び続けたのは、表現にこだわった文学文化研究を希求していたからである。
- 30 加藤泰史・後藤玲子編『尊厳と生存』法政大学出版局、2022年。
- 31 加藤泰史「編者前書き コロナ・パンデミック下で「生存」／「生命」が「尊厳」概念を問いただす」『尊厳と生存』（加藤泰史、後藤玲子編）法政大学出版局、1～20頁、2022年。
- 32 ギブソン松居圭子「第四章 感染症文学・生命・尊厳」『尊厳と生存』（加藤泰史、後藤玲子編）法政大学出版局、108～134頁、2022年。
- 33 ギブソン松井の論考では「ジョゼ・サラマーゴ（2020）『白の闇』河出書房新社」と出典情報が書かれている。
- 34 佐藤秀明「作品論」『ハンドブック——日本近代文学研究の方法』（日本近代文学会編）ひつじ書房、22～30頁、2016年。
- 35 ローレンス・ビュエル『環境批評の未来——環境危機と文学的想像力』（伊藤詔子、横田由理、吉田美津、三浦笙子、塩田弘訳）音羽書房鶴見書店、2007年。
- 36 同上、1頁。
- 37 同上、3頁。
- 38 同上、17頁。
- 39 同上、25頁。
- 40 佐藤香織「第6章 「手」が創設する倫理——『この世界の片隅に』から考える人間と環境の関わり」『映画で考える生命環境倫理学』（吉川孝、横地徳広、池田喬編著）勁草書房、113～131頁、2019年。作品で描かれる手の表現にこだわり、精読的に作品内の意味を探索することに紙幅の多くが占められている。そのためか、文学文化研究にとっても近接している論考と評価できる。
- 41 加藤夢三『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』ひつじ書房、2019年。
- 42 同上、22頁。
- 43 黒田俊太郎「加藤夢三著『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅——』」『日本文学』69(7)、56～57頁、2020年。
- 44 『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅——』のさらなる解説や評価は、たとえば以下を参照されたし。西貝怜『『合理的なものの詩学』の学際性——科学文化論からの解説と評価——』『近代文学合同研究会論集』17、7～18頁、2022年。
- 45 加藤夢三「補論 i 「存在すること」の条件——東浩紀『クオントム・ファミリーズ』の量子論的問題系」『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』ひつじ書房、306～329頁、2019年。なお、この論考で用いられた作品は「『クオントム・ファミリーズ』（河出文庫、二〇一三・二）」と書かれている。
- 46 加藤夢三『並行世界の存在論——現代日本文学への招待』ひつじ書房、2022年。
- 47 同上、185頁。
- 48 伴名練「なめらかな世界と、その敵」『なめらかな世界と、その敵』早川書房、5～48頁、2019年。
- 49 註46と同じ、かつ172頁より。
- 50 同上、187頁。
- 51 日中鎮郎「訳者あとがき」『虚構と想像力——文学の人間学』（新装版、叢書・ユニベルシタス794）（ヴォルフガング・イーザー著、日中鎮郎、木下直也、越谷直也、市川伸二訳）法政大学出版局、523～543頁、2023年。
- 52 以降の引用は、以下で公開されている各話による。『機動戦士ガンダム 水星の魔女』<https://www.amazon.co.jp/gp/video/detail/B0B8NWMVCG>（最終閲覧日：2023年12月23日）
- 53 YouTubeのガンダムチャンネルにて、いわゆるクレジットなしのオープニング映像が公開されている。『機動戦士ガンダム 水星の魔女』オープニング映像（ノンクレジット） | YOASOBI「祝福」<https://www.youtube.com/watch?v=aU8ruUe7UIE>（最終閲覧日：2023年12月23日）。

- また、同様にAyase / YOASOBIにて「祝福」のフルヴァージョンも公開されている。
- 「YOASOBI「祝福」Official Music Video (『機動戦士ガンダム 水星の魔女』オープニングテーマ)」<https://www.youtube.com/watch?v=3eytpBOKOFA> (最終閲覧日：2023年12月23日)。
- ⁵⁴ 『水星の魔女』の脚本を担当する大河内一樹が、この歌のために書き下ろした原作小説もある。大河内一樹著、矢立肇、富野由悠季原作「ゆりかごの星」<https://g-witch.net/music/novel/> (最終閲覧日：2023年12月23日)
- ⁵⁵ 小川公代「翔ぶ女たち3：魔女たちのエンパワメント——『テンペスト』から『水星の魔女』まで」『群像』講談社、78(9)、220～252頁、2023年。
- ⁵⁶ 以降、アニメの「PROLOGUE」内で登場人物の発する言葉の引用は、以下で公開されている二編の小説と変わらないことを確認したのみ、その小説から行う。「発売直前！『小説 機動戦士ガンダム 水星の魔女』の「PROLOGUE」(前編)を特別公開！」『New Type』https://webnewtype.com/trial/novel_g-witch/entry-20195.html (最終閲覧日：2023年12月23日)。「発売直前！『小説 機動戦士ガンダム 水星の魔女』の「PROLOGUE」(後編)を特別公開！」『NewType』https://webnewtype.com/trial/novel_g-witch/entry-20197.html (最終閲覧日：2023年12月23日)。
- ⁵⁷ 「株式会社ガンダム プロモーションビデオ」https://www.youtube.com/watch?v=rLr_ZFXQq4Q (最終閲覧日：2023年12月23日)
- ⁵⁸ 「機動戦士ガンダム 水星の魔女——彼女たちに祝福あれ」『アニメージュ』徳間書店、46(1)、12～33頁、2023年。本文中の引用は12頁より。
- ⁵⁹ 『水星の魔女』における「生命倫理」的問題は、あまりに虚構的である。それをなにか現実の生命倫理的な事例に当てはめることも出来るかもしれないが、それは『水星の魔女』を<文学文化>として扱う考察とは距離がでてくる。
- ⁶⁰ 「機動戦士ガンダム 水星の魔女——孤独と悲しみの深淵から」『アニメージュ』徳間書店、46(7)、34～41頁、2023年。本文中の引用は34頁より。
- ⁶¹ 「よくある質問 - 中高生から寄せられた質問——そもそもゲノム編集技術と、遺伝子組み換え技術の違いはなんですか。(2021年1月・高校生)」『ハイテク情報普及会』<https://cbijapan.com/faq/student/412/> (最終閲覧日：2023年12月23日)
- ⁶² 「解禁！“ゲノム編集食品”～食卓への影響は？～」『クローズアップ現代』NHK、2019年9月24日、<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4331/> (最終閲覧日：2023年12月23日)
- ⁶³ 横知徳広「『風の谷のナウシカ』前史の生命環境倫理学—現実と虚構のあいだで〈進化史的アプリオリ〉を考える—」『人文社会科学論叢』7、1～18頁、2019年。
- ⁶⁴ 本文では直接触れなかったが、『水星の魔女』についての先行論として、以下もある。宇野常寛「9.『機動戦士ガンダム 水星の魔女』と「箱庭」の問題」『2020年代の想像力——文化時評アーカイブス2021-23』(ハヤカワ新書011)早川書房、85～92頁、2023年。
- ⁶⁵ 註22と同じ。74頁。
- ⁶⁶ この学際的な研究における具体性の問題は、以下の本で詳細に検討されている。萩原広道、佐野泰之、杉谷和哉、須田智晴、谷川嘉浩、真鍋公希、三升寛人編著『〈京大発〉専門分野の越え方——対話から生まれる学際的探求』ナカニシヤ出版、2023年。
- ⁶⁷ 特にケアの倫理研究と文学文化研究の繋がりが強いと思われる一冊のみ、情報を挙げておく。小川公代『ケアする惑星』講談社、2023年。
- ⁶⁸ 福嶋亮大『感染症としての文学と哲学』(光文社新書1833)光文社、2022年。
- ⁶⁹ 同上、351～352頁。